

佐賀の楠流

―堀江甚三郎重治と南木流兵書―

今井 正之助

はじめに

別稿で扱う。

一、蓮池鍋島家文庫の楠流兵書

拙著『『太平記秘伝理尽鈔』研究』（汲古書院、二〇一二）で『理尽鈔』の類縁書・派生書の整理をおこなった。不十分なものであることは自覚していたが、『蓮池鍋島家文庫目録・倉永家資料目録』（佐賀県立図書館、一九八五）を見落としていた。蓮池鍋島家文庫には、他には存在の知られていない楠流関係図書が多く、遅まきながら概要を紹介する。同文庫の楠流兵書のいくつかは、堀江甚三郎重治なる人物が伝授しており、その伝授奥書の日付は、これまで知られていた南木流兵書の成立期を遡るものである。

なお、佐賀県立図書館には、『桜井之書』『楠家伝七巻書』『南木武経』『太平記綱目』等の版本も存在するが、それらは

以下、○書名（ ）内は請求記号。◆を付した図書には、堀江甚三郎重治の伝授奥書がある。（◆）と表示した『楠家十書』（5）は堀江の名を挙げてはいないが、末尾にある正成から正虎にいたる伝系が『神道正授巻』（1）と同じ堀江伝授資料特有のものであり、◆に準じるものとみなした。

複数の図書を合綴したものは、それぞれの最初に書名（扉題と称することとする）を左肩に記した丁を置き、次丁から本文を始める形式が多い。

○楠家五精通鑑 (連 352/3)

楮紙袋綴写本一冊。茶色地に瓢箪を描いた表紙25.5×18.7cm。左肩に薄赤色楮紙題簽に「楠家五精通鑑」と墨書。三書を合綴。

(1) 扉題・内題「五精通鑑」◆

半葉七行漢字六字の見出しに、それぞれ二行の漢字片仮名交じりの注解を付す。見・観・眺・視・看の五精各一条全五五条。見精と眺精の最初の条および看精第九条を示す。へん内は割注。句読点は今井。

旗動還止之見(敵ノ軍便(※今井注「軍使」か)ノ指物動テ、旗本ヨリ来リ止ハ軍ノ有。還ルハ軍ナシト知レ。大ヤウ不違)

光変騒動之眺(日月黒赤変ナルハ世ノ乱ノ印也。日変ヲ天子ニ、亦ハ将ノ軍ノ禍ヒナリ、月ノ変ハ国母・ミダイ・長臣ノ禍也。三日月イニ)

三相謂行之看(倭ト姉(※奸の誤リ)ト愚ト言コトヲキ、常々ノ行跡ヲミテ、役ノ人ニシ、便武者ニモソレノヲ計ル也。口伝多シ。恩地書ニツブサ也)

経験則による観察、軍配兵法、為政論などを内容とする。傍線部(恩地左近太郎聞書には倭奸の論が多い)から、本書が楠家の兵書と確認できる。五精に続き、「常地変」「転化之割」「炬火之図」など三六の項目と簡単な解説文あり。

末尾は以下のごとし。「花押」は外郭のみを線画したもの。『正成恩地問答』写本一軸(連 991/296)の巻末が残っておれば、

重治自筆の花押が確認できたかもしれない。

良将両陣 口伝

堀江甚三郎

万治元^{戊戌}天九月吉日 重治「花押」

從五位藤原

直澄公

(2) 扉題・内題「芙蓉陣繰練次序」

半葉漢文体八行(訓点等無し)。芙蓉は蓮をさし、蓮池城は芙蓉城との別称があった(平凡社日本歴史地名大系『佐賀県』『蓮池城跡』)。蓮池藩陣立の繰練の次第の意であろう。第一「行軍進発」から第二十二「振旅」に及ぶ。末尾に「安政三年冬十一月」とある(安政三年は西暦一八五六年)。

(3) 扉題「天真流貝譜」、内題「天真流貝之譜」

法螺貝の奏法を記号で示すもの。奥書等無く、堀江との関わりは不明であるが、堀江には戦陣楽器故実(連 991/35)など武家故実の述作もあり、関わりがあるかもしれない。

○神道正授巻 (連 352/4)

楮紙袋綴写本一冊、藍色無地表紙25.7×19.0cm。左肩題簽残存(右側中程に「之巻」のみ判明)。

(1) 扉題「神道正授巻」◆

本書は「藏身法」に始まり、神道正授巻の本体は無い(後掲の『楠家十書』(1)のあり方参照)。

下記の奥書があるが謎が多い。最初にある「楠正明」がいかなる人物か不明。正儀から正虎にいたる系図は、尊卑分脈四「橘氏系図」等に近い。後述の「楠家十書」「軍元立将之法」も正虎までを表示するが、盛景¹は「盛宗」、長盛²は「長宗」とあり、「楠家十書」の系図が尊卑分脈に合致する。正盛から正虎までの大饗氏（正虎は後、楠氏を称し、長譜と号す）と重政に始まる堀江氏との繋がりは、血統か伝系か不明。正虎が永正一七年（一五二〇年。桑田忠親「楠長譜の九州陣道の記」国語国文10―8、一九四〇・八）の生まれであり、以下代々、二〇代前半で子を得る。ただし、堀江氏のことはこの系図以外には不明である。藤原直澄は、蓮池鍋島家初代。在位一六三九―一六六五。万治元年も寛文二年（一六六二）もその在位期間。直之は二代藩主であるが、万治元年の伝授と寛文二年の署名・花押の関わりもよくわからない。ちなみに直之には、家臣の問いに直之が答えるという体裁の大部の著述『兵法問答』（写本一七卷一〇冊。「延享二年乙丑孟冬之日龍津之□介紫石謹撰」と記す後序あり。紫石は龍津寺の禅僧）があるが、北条流兵法を旨としている。

右之秘術、楠正明令伝授者也。

建武三年五月日 正五位前河内守楠正成在判

正平四年正月日 從四位橘正行在判（以上5オ）

（※以下は改行を「」で示す）左馬頭正儀／右馬助正秀／大饗氏
道橋正盛／右衛門佐橋盛信／右馬頭盛景¹（5ウ）

太夫判官盛秀／右馬頭長盛²／左馬助隆成／河内守正虎／堀江河内守重政在判（6オ）
／堀江無樂入道重直在判／堀江新五郎重清在判／堀江左門尉重勝在判／

万治元^成天九月吉日 堀江甚三郎重治在判（6ウ）
從五位藤原直澄公

右神道正授卷者贈三位中将橘正成家伝之秘書并二伝授之蘊奥也。為^レ其妙包^レ括事理^二而尽^上、兼存^レ治乱^一而説。至哉、奇哉、呼之矣。于爰汝志于此深、望于此高故、今許与焉。向來鍊心熟習而到^レ其妙^一、則於^レ治^二天下国家^一、正已治^二入之道^一何有乎。禅登^二須弥^一猶有^二青天^一云々。汝子平素其思焉必莫^レ怠云。（7オ。訓点は引用者）

從五位前甲斐守鍋島氏

寛文式^主年八月二日 藤原朝臣直澄「花押」（7ウ）

※花押は縁取りし塗りつぶしたもの
從五位前摂津守鍋島氏

藤原朝臣直之「花押」（8オ）

（2）扉題「三教卷」◆、内題「三教」

「大道三権（第一明心／第二治身／第三正道*）」（*本文中には「正道」、「兵用道之三権（官／禄／死）」、「軍勛之三権（賞／罰／備）」、「攻戦之篇」により成る。三つの三権に付された図は南木流の三卷書（「楠家十書」で言及 付図に似ている。「攻

戦之篇」に「一城ヲ囲ニ有五法。一日時、二曰勞謀、三曰裏分、四曰不意、五日用具。…勞謀トハ城中ノ兵氣・大将ノ威ヲ勞謀也」とある「勞謀」は、「楠家十書」(5)に説く「勞謀四ヶ大事」の内容に共通する。したがって、本書も南木流の兵書とみてよいだろう。末尾に次の伝授奥書あり。

兵法禁約之条(三条を略す)／右三ヶ条於令變約者、予雖莫慎／天必大有令罰變者。仍誓約如件／堀江甚三郎／万治元戊戌天九月吉日／(予裏は白紙)

(3) 扉題「具足飭之次第」◆

内題なし。「兵具之巻」(兜、鎧、籠手等の図解)に続き、「一楊梅桃李ハ、ウルミ色・モエキ・白糸ニテヲドス」以下全九条の解説あり。末尾に以下の伝授奥書。

万治元^{戊戌}天九月吉日 堀江甚三郎重治判

從五位藤原

直澄公

(4) 扉題「九字大事」、内題「兵法九字大事」

以下三書は堀江には関わらないが、伝受者が鍋島直澄であるので、触れておく。

「臨兵闘者皆陳烈在前」の九字の修験道の修法を説くもの。下記の伝授奥書あり。尊祐は「徳善院の十代」住持(長野覺「彦山と佐賀徳善院」一四七頁。白濱信行「肥前修験道の研究」〔叢書房、一九九〇〕所収)。徳善院は、佐賀市嘉瀬町大字中原にある眞言宗の寺院で「彦山権現の分霊を勧請し、徳善院権現又は徳善彦

山と称した。爾来藩主の祈願所となり、藩主の名代として、徳善院住持が彦山に参詣することがあった」〔校註葉隠 復刻版〕二九七頁)という。

慶安元^{戊戌}祀八月時正

授与 鍋島甲斐太守藤原直澄

伝授 大阿闍梨法印権大僧都尊祐

(5) 内題「兵法十字大事」

天龍虎王命勝是鬼水大の十字の修法を説く。伝授奥書あり。

慶安元^{戊戌}載八月時正

授与 鍋島甲斐太守藤原直澄

伝授 大阿闍梨法印権大僧都尊祐

(6) 内題「八陣 真備 口伝」

魚鱗・雁行・偃月・長蛇・衡軛・円形・鶴翼・鋒矢の八陣の図、解説。「心字備」解説以下「軍神ハ其日其方一東方角星二当」まで。奥書等無し。

○「楠家十書」(連 991/260)

楮紙袋綴写本四冊。白地に薄い青色で波線状の横刷毛目表紙 29.3×25.7cm。外題打付書「楠家十書 一(一四止)」

本書は三巻書系統の南木流兵書との関わりが深く、これに別の兵書を取り合わせている。拙著五三一頁で蓬左文庫蔵「南木流家伝之三巻」【上・中・下】巻の順序を基準として、類縁書の分類を行ったので、【】内に該当巻を示す。

第一冊

(1) 内題「楠正成神道之卷」↓下

半葉一〇行漢字片仮名交じり。『南木武経』巻五(安藤掃雲軒の注解「和曰」部分は比較対象から外す。以下同様)、『楠家伝七巻書』巻六、『楠知命鈔』巻二、加越能文庫写本『楠三巻書』中巻などとは同一内容であるが、末尾「隔千里知敵ト云ハ」の記述量が多い。また、この記事に、(イ)「右五神通之事…ト云々／楠河内判官正五位上橘朝臣／建武三年五月吉日 正成在判」の跋文、跋文の丁裏に(ロ)「自修」「自悟ノ法」と続くが、他書のように(ロ)(イ)とあるのが本来の形であろう。

(ロ)の丁の次には「藏身法」二丁半があり、末尾に「右秘術共楠正明令伝受者也」(藏身法は楠正明の伝えるもの、という意)とある。この「藏身法」は蓮池本以外の「神道正授巻」には含まれないが、「神道正授」の真言呪術的兵法と異質なものである。前記の「神道正授巻」(蓮池本)が「藏身法」に続いて建武三年の正成奥書を記すところから、蓮池本は「藏身法」も含めて「神道正授巻」と扱うのであろう。

(2) 軍政集

内題は無く、「天文第一／日部」と始まる。半葉一〇行漢文体(訓点無し)。尾題・奥書等無し。部分的な調査ではあるが、市立米沢図書館興譲館文庫蔵古写本、天理図書館国籍類書第一九八冊写本(江戸前期)、島原図書館松平文庫蔵無刊記版本と比較すると、蓮池本は米沢本に近い。版本の写しなどでは無い

と思われる。

例、不獲已…米・天「…己」。版2オ7行目「…止」
挑戦之時…米・天、同じ。版16ウ10行目「挑戦時」
不忘身愼…米「…愼」。天・版17オ2行目「…怪」
蓋代…米「蓋代」。天・版17オ4行目「蓋代」

第二冊

(3) 内題「太平記法令之巻」

半葉一〇行漢字片仮名交じり。最初の三丁は朱点、朱庵点多し。以下は散見。

関連資料は、『楠家伝七巻書』(寛文九年[1669]序)巻一「治国法令」、「楠法令巻」(延宝九年[1699]刊)及びそれらの典拠である理尽鈔巻三五・二七・二六の記述。『七巻書』巻一は、「治国法令」に「伝法之起」「今川心性入道聞書」「今川心性入道奥書」を続け、末尾の「奥書」を「右法令治国ノ巻ハ…」と始めているから、巻一全体を治国法令巻とみなしていることになる。しかし、「伝法之起」は、他の三巻書系統いずれも上(軍元立将之法)末尾に位置づけており、(5)で扱う。

以下にみるように本書は、理尽鈔との紐帯(とりわけ太字部分)を留めている。七巻書は独立した著作とするために、そうした箇所を削除したものと思われるが(法令巻が七巻書をふまえていることは拙著五四二頁)、蓮池本「太平記法令之巻」には独自表現もある。蓮池本を七巻書の直接の先行形態とは認めがたい。

理…是頼義ガ奥ノ両国ヲ治メテ後、息・義家ニ言渡セシ所ノ一巻ノ心是也。(卷三五20ウ)

○政道ノ為ニ怨ト成ル物第一ニ無礼ト云々。評云少ノ法ヲ破レハ大法自然ニ破ル事双ル指ノ如シ。(卷三五96ウ)

蓮…是頼義朝臣、奥ノ両国ヲ治テ後、息ノ義家ニ渡セル所ノ一巻ノ心也。

一政道ノ為ニ怨ト成ル物第一ニ無礼ト云々。評二曰小法・破レハ大法漸々ニ破ルコト並ヘル指ノ如シ。

七…是頼義ノ奥州ヲ治テ後、息義家ニ言渡セシ所ノ一巻ノ心ナリ。政道ノ怨トナル者第一無礼也。少ノ法ヲ破ハ大法自然ニ敗事並ベル指ノ如シ。(卷一2オ)

法…天下国家ノ大ナル怨トナルモノナル故ナリ。タトヒカヤウニ罪アル人ヲ罰スルニモ(下略…法令巻独自詞章)(2オ)

理…主ヲ覆シタル者古今ニ多シ。遠ハ平清盛、源頼朝、近クハ足利尊氏也。功誇臣有ランニハ大ナルハ国ヲ失、小ハ家ノ所領ヲ失シ事決定セリ。去レハ明君ノ忠臣ヲ賞禄スルノ法一ノ巻ノ評ニ之記スルノ間之ヲ略ス。功誇ノ臣ヲハ威ヲ、サヘヨト謂シ善言忘ル事ナカレ。(卷三五100オ)

蓮…主ヲ覆セル無道人古今ニ多シ。平清盛、源頼朝、近ハ足利尊氏也。功ニ誇ル臣有レハ大ナルハ国ヲ失ヒ、小ナルハ家ヲ失、所領ヲ失シコト決定セリ。去レハ明君ノ忠臣ヲ賞

禄スルノ法一ノ巻ノ評ニ之記ス間之ヲ略ス。功ニ誇ルノ臣ヲハ威ヲ押ヨト云ヒシ善言忘ルコト勿レ。

七…主ヲ覆シタル者古今多シ。平清盛、源頼朝、近ハ足利尊氏ナリ。功ニ誇ル臣有ル則ハ国ヲ失ヒ、家、所領ヲ失シコト決定セリ。功ニ誇ルノ臣ヲハ威ヲ押ヘヨト云シ先言ヲ忘ルコトナカレ。(卷一4ウ)

法…主ヲ覆ス事古今多シ。平清盛、源頼朝、近クハ足利尊氏等ナリ。功ニホコル臣ヲハ威ヲサヘヨトイヒシ先言マコトニナルカナ。(4ウ)

(4) 内題「三妙無尽法」↓[中]

半葉一〇行漢字片仮名交じり。「三妙無尽法」とは、直截的には、下記に示した構成要素の①部分を指すが、⑫までの全体の書名とされている。

本書(以下「蓮池本」と称する)の構成を他の関連書と比較すると『楠知命鈔』が比較的近い。細部の詞章はいずれも大きな相違は無いが、蓮池本の挿図は独自性が強い。

蓮池本①無天下敵トハ…、家満財トハ…、国兵集トハ…、凡万物ノ始ル処…「四武正神図」、②教戦ノ法、③間地定法「備図五種」、④地形転変之法、⑤火戦之法、⑥船軍之事、⑦夜討之軍法之事、⑧簞之事「図二種」、⑨十死一生之合戦事、⑩気変応化之事、⑪兵氣之事、⑫自悟法之工夫

『楠知命鈔』卷三①「四武正神図」、②、③「備図五種」、④。

卷四⑤、⑥、⑦、⑧「図」、⑨、⑩、⑪、⑫

加越能文庫蔵写本『楠三卷書』（5オ→21オ）①「四武正神図」、

②、③「備図五種」、④、⑤、⑥、⑦、⑧「図」、⑨、⑩、⑪、

⑫「建武三年五月日」正五位河内守橘朝臣正成在判」

『楠家伝七卷書』卷三（4ウ→14オ）①「八陣図」「四武正神図」、

②、③「間法定法」の見出し無し」「備図五種」。卷四④、⑤、

⑥、⑦、⑧「図」、⑨、⑩、⑪、⑫「從五位河内守橘朝臣

在判」

『南木武経』卷三①「八陣和図」「和書本起」、②、③「備図五種」、

④、⑤、卷四⑥、⑦、⑧「図」、⑨、⑩、⑪、⑫「建武三

年五月日」正五位河内守橘朝臣正成在判」

(5) 内題「軍元立将之法」(◆)→[上]

半葉一〇行漢字片仮名交じり。(4)との間に「軍元立将之法(七行略。抹消の×印あり)三妙無尽法 下」とする半葉があり、次丁からあらためて「軍元立将之法」を始めている。他資料と比較して、蓮池本には傍線部のような問題があるが、注目すべきは末尾の系図である。正儀から正虎にいたる部分、蓮池本は、尊卑分脈四「橘氏系図」(新訂増補国史大系五五頁・尊卑分脈脱漏「橘氏系図」(統群書類従五上、二〇七頁・「橘氏系図別本」(統

群書類従七上、一七頁)などと一致する(隆成*は「橘氏系図別本」に「成隆準人祐」^(隆成)とある)。一方、「楠三卷書」「楠知命鈔」の系図は「橘氏系図」(群書類従五、二七六頁)に近い。ちなみに『南木武経』巻五「神道正授之卷」巻末の系図も「楠三卷書」と同種。群馬大学新田文庫『楠三卷之書』、八戸市立図書館「楠軍書」、山口大学棲息堂文庫「〔無尺卷〕」なども同様。系図のあり方はあらためて確認を要する。

蓮池本①前文、②司天行、③妙術「図一」、④円謀、⑤營謀^{第1}四ヶ大事、⑥密宝、⑦天下乱相(※他書の「十悪」の4項と5項との間に「長久治り大名ヲ滅シ年人多ハ乱相也」があり、「一項、⑧二相之大悟ノ法、⑨十六之攻法、⑩「自悟之法」無し)、⑪「伝法之起」見出し無し)「建武三年五月吉」正五位上前河内守橘正成在判／帯刀先生正行／右馬頭正儀／右馬助正秀／大饗入道橘正盛／右衛門佐橘盛信／右馬頭盛宗／大夫判官盛秀／右馬頭長成／左馬助隆成*／河内守正虎」

『楠三卷書』下巻①、②、③「図1・説明」「図2」、④、⑤勞謀四ヶ条之大事、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪「建武三年五月日」正五位河内守橘朝臣正成在判／左大臣橘諸兄公末孫／「正五位／正成」橘河内守／正行 橘帯刀／正儀 橘次郎左衛門／正平 同新平／朝成(和田平左衛門／法名浄水イ浄水／政高 同新左衛門／正直 同平八郎／成晴 同掃部／正光 和田平右衛門正信／正俊 楠右馬允女子／正長 同右近僧修戒／正虎(同河内守／法名長證)／女子／正広 法名広禪／右

之三卷楠正成所伝息正行之書也」

『楠知命鈔』卷四（10オ～21オ）①、②、③「[図1・説明]」「[図2]」、

④、⑤勞謀四ヶ之大事。卷五⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪「建

武三年五月日 正五位河内守楠朝臣楠正成在判／楠帶刀 正行

／楠次郎左衛門 正義／楠新平法名淨永 正平／和田平左衛門

朝成／和田新左衛門 政高／和田平八郎 正直／和田掃部

成時／和田平右衛門 正光／ 正信／楠右馬允 正俊／楠

右近 正長／楠河内守 正虎／女子／女子／ 法名広禪 正

広／安間六郎 正賢／安間七郎 成賢／安間八郎 賢行」

『楠家伝七卷書』卷五①、②、③「[図1・説明]」「[図2]」、④、

⑤勞謀四箇条之事、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩「從五位河内守楠

朝臣 在判」。卷一（17ウ～20オ）⑪。

『南木武経』卷一（12ウ～35オ）①、②、③「[図無し]」、④、⑤勞

謀四ヶ之大事、⑥、⑦「建武三年五月日 正五位河内守楠

朝臣／正成在判」（※この正成奥書は「南木武経」巻一の体裁を

整えるためのもの）。巻二⑧、⑨、⑩、⑪「建武三年五月日

正五位河内守楠朝臣／正成在判」

第三冊

（6）内題「正成恩地問答 軍用秘術聴書」

半葉一〇行漢字片仮名交じり。内容上の問題は第二章で扱う。

（7）内題「恩地之左近太郎聞書」

『理尽鈔』付載の『恩地左近太郎聞書』と同種。拙著二七二

頁に掲出した「千破剣ノ城ノ事」があり、二六五頁に例示した
詞章の特色から、拙著二五九頁に「非版本系写本」と分類した
中のC1類に属する写本である。

第四冊

（8）内題「太平記理尽口伝巻第一上」

（9）内題「太平記理尽口伝巻第二下」

（10）内題「太平記図経口伝書第三」

いずれも半葉一〇行漢字片仮名交じり。他の冊もそうである
が、一筆書写ではない。挿図は多彩色。章段冒頭に朱〇印しを、
本文のごく一部に朱庵点を付す。第四冊三書の内容は、『太平
記理尽図経』五巻の巻一（第一上）、巻二（第二下）、巻五（第三）
に相当するが、非版本系の写本であり、平戸山鹿家蔵『太平記
理尽口伝』（内題・外題とも同じ。第二、第三は「太平記評伝図経口
伝聞書」。一冊本であるが、第一上・下、第二上・下、第三と区分）に
近い。そのことは「赤坂之城軍事」を版本のような巻一末尾で
はなく、第一下の巻頭に置いていること、第一「江州唐崎浜合
戦之事」の冒頭を「南岸円宗勝行早雄ノ同宿トモ」（版本は「山
法師トモ」と始めていることなどにより確認できる。

問題は、『楠家十書』という書名が（8）（9）（10）をそれ
ぞれ一書と数えてのことと考えられる点である。

（1）（4）（5）は三卷書系統の南木流兵書と共通し、（3）
は『楠家伝七卷書』と、（6）は『楠家伝七卷書』『楠知命鈔』

と関わりがある。これらは蓮池鍋島家文庫の他の蔵書の奥書と照らし合わせると、堀江甚三郎重治（後述）が関わっているものと思われる。しかし、著作内容を熟知しているはずの伝授者堀江が『太平記理尽図経』第二上・下を欠く（8）（9）（10）をそれぞれ一書と数え、『楠家十書』と名づけたとは考えがたい。『楠家十書』という編纂は後人の所為であろう。

そのように考えて、さらに問題が残る。（7）や（8）（9）（10）などは南木流が批判し、乗り越えようとした理尽鈔に繋がる書物である。たとえば、語り手を恩地左近正俊とする（6）は、恩地左近太郎（理尽鈔と共通する呼称。理尽鈔では「満一」とする（7）を意識して、それとは異なる著述に仕立てたものである。さらに、（2）軍政集を理尽鈔も含めた楠家関係兵書として扱うことは、他に例をみない。こうした不審点も、本書が後人の手になる編纂物と考えれば、一応合点がゆく。再度しかし、軍政集、恩地左近太郎聞書、太平記理尽図経いずれも、版行され普及していた系統ではない。後人が適宜、書物を寄せ集めた場合、こうした結果になるということも考えがたいのである。堀江が残した一群の図書があり、それを後人が『楠家十書』という括りでまとめあげたとみなすのが自然ではなからうか。ことは、堀江なる人物がいかなる系譜の兵学者であったのか、という点につながる。

○『楠正成一巻之書』（運391/261）

楮紙五針袋綴写本一冊。紺無地表紙26.0×18.4 cm。薄赤色布目地題簽に「正成一巻書 雜書／正成恩池問答」と墨書。

（1）扉・目録題「楠正成一巻之書」。内題「楠正成一巻書」半葉一〇行漢字片仮名交じり。版本「楠正成一巻書（序ナシ。無刊記）」と用字・字詰めに至るまでは同一。

（2）扉題「雜書」、内題無し。

墨付三九丁。半葉二行漢字片仮名交じり。内題等なく、「一家康公名古屋御在陣之時御徒然ノ折節ハ、山本帯刀ヲ被召出、謙信流ノ軍法ヲ御尋アリシ」と始まる。本書は『參河後風土記』の抜書であり、右は卷三〇「一家康公召ニ山本帯刀ニ而令尋ニ法令手合ニ事」の冒頭部分に一致する。続いて卷三四・三五のほとんどすべての記事を書き連ねるが、卷三五の終から二章段目「家康公御ニ尋推陣之法于帶刀ニ事」の途中に相当する「：用心スルヲ専トセリ或味方」までで唐突に終わっている。

『參河後風土記』の写本は鍋島家文庫（佐賀県図）、小城鍋島文庫（佐賀県）に数部存在し、実際に抜書によつて「雜書」が成った可能性もあるが、『山本帯刀軍法物語』（蓬左文庫本に拠る。漢字平仮名交じり二行。同類と思われる図書は他の文庫等にも）等の存在にも留意すべきであろう。『物語』も『參河後風土記』に基づき、卷三二後半、三三全巻、三三〇の一章段、三四・三五全巻に相当し、その後半部分《内》が「雜書」と重なる。卷三〇のような問答は、卷二〇、二三、二九にもあり、抜き書きの結果が偶然一致したのではないだろう。傍線部（卷三〇と三四冒

頭章段)を「物語」は一続きにしているが、その方が「備立」の箇条書きとして体裁が整っている。ただし、箇条書き末尾に続く記事は「右此備は義経朝臣の衣川水鑑に記さる、所平地の法也。四武の陣の委説也。楠正成此備図に基付て…」とある。この記事は後述のように、南木流三卷書系統の兵書に拠るものであり、『参河後風土記』も「雑書」も布陣の図を示している。『物語』はその図を欠いている。

また、右に続く部分、「雑書」は「然ル時ハ敵、勞シテ終ニ可落。又、城ヲ取事、暫時ノ難ヲ通シ為ナラバ…」として、南木流兵書に一致するが、『物語』(蓬左本39ウ)は傍線部を欠く。同様の例は他にもあり、『物語』は体裁は整っているが、本文には崩れが認められる。しかし、『物語』「龍陣三段附吉凶有大将之心事」(43ウ)にある「備の図」を「雑記」が欠く、という例もある。「雑書」が『物語』の直接の依拠本とは考えがたい。『物語』のような構成の『参河後風土記』抜書本があり、ともにそれに拠つたとみるべきであろう。

『参河後風土記』(愛知教育大学蔵明倫堂旧蔵写本に拠る。以下「原書」)は慶長一五年平岩親吉の自序があるが、成島司直が「蓋係寛明間好事者仮托也」(改正後風土記序。天保三年)、「原書を撰述せるは、寛永・正保の頃也」(原書凡例。天保四年)、「此書を偽撰せるは、寛永の頃、京の処士、沢田源内氏郷といふ者のしるせし所、いちじるし」(三河後風土記選者考。天保四年)と主張し、『改正三河後風土記』(宇田川武久校注、秋田書店刊本に拠る。

以下「改正本」を著したことは周知のところである。原書四五巻が改正本では四二巻に減じているが、巻三二までの項目はおおよそ一致する。原書巻三二尾題は「参河後風土記卷卅二軍令之巻終」とあり、巻三三から巻三五までの目録題・内題・尾題にはすべて「軍令巻」が含まれている。殊に巻三二後半から巻三三までの部分は、純然たる兵書の体をなしている。改正本は他の巻でも原書の兵法問答を除外しているが、この巻三二後半から巻三五をそっくり削ったことが、巻数相違の主たる原因となっている。ちなみに、山本帯刀は原書巻二三に「山本帯刀頼重」とあり、改正本巻九(秋田書店刊本・上二九八頁)に「此程山本帯刀成行(一本頼重とす、山本勘助道鬼人達が弟といふ)に命ぜられ」(この前後の詞章は原書には無い)とある。実在の人物のようであるが、以下に述べるように、その兵法は偽作であり、原書の描き出す謙信流の兵法家としての存在は疑ってかかる必要がある。

さて、山本帯刀の語る兵法記事には、先にふれたように、南木流三卷書系統の大幅な撰取が認められる(本文1オウ13ウに及ぶ。他の典拠は未勘)。

家康公、手分ノ事尋玉フ。帯刀「是以前申上タリ。陣中規程如左。【一、陣中ノ通路如图。一、二拾五人二人ノ頭、三百人(二一人)誤脱ノ将アリ。一、捻両(而の誤り)軍士ノ使ハ可_レ騎馬於早通」。(中略・図あり)一、騎馬ノ事手ノ通三分一可立。残ハ左右二一分宛四手可立。本陣トノ

間二百程可也。】右此備ハ、義経公『衣川水鑑』ニ記サル
処也。平地ノ注（法の誤り）也。四武ノ陣ノ委説也。楠正
成此陣圖（圖の誤り）ニモトヅキテ種々ノ陣圖ヲ構フ。（下略）
ト申上ル。（4オ〜5ウ）

【一】内は、南木流「三妙無尽法」の記述にはば一致する。

本稿は、堀江が佐賀で伝授した万治年間にはすでに南木流兵
書（の一部）が存在していたことを明かすものであるが、『改正
三河後風土記』がいうように、『参河後風土記』が「寛明間」寛
永明暦の間、もしくは「寛永・正保の頃」成ったとすれば、さ
らにその成立が遡る。

『参河後風土記』巻九「岡崎三郎信康卿祝言付駿州今川家
踊尊卑事」には、「義満將軍御治世ニ細川頼之初テ重坊ト云ル
法師ヲ仕立」（理尽鈔巻四〇29ウ）という記事もある。『理尽鈔』
刊行の前後であり、抛ったのが版本か写本かわからないが、『理
尽鈔』の享受としても早い時期の一例として注目される。

（3）内題「正成恩地問答」◆

半葉一一行漢字片仮名交じり。内容上の問題は第二章で扱う。
建武三年五月九日の恩地左近丞正俊の奥書に続けて、以下の伝
授奥書あり。

堀江甚三郎

万治元成天九月吉日

重治

從五位藤原

直澄公

（4）扉題「射初卷」、内題「射初之巻」

本文二丁半。条目七およびの場の図一。半葉六行漢字片仮名
交じり。奥書等無し。

○「正成恩地問答」写本一軸（連391/296）

茶色地、斜め格子に瓢箪の金欄表紙（葉・茎に緑色糸も用いる）。
外題新補白紙に「正成恩地問答」とサインペン書き。見返は布
目地金箔。内題「正成恩地問答 軍用秘術聴書」。金泥で界線
を施した料紙（斐楮混紙、 $83\frac{1}{2} \times 12$ cm）を八枚継ぐが、末尾（二
枚程度）欠損。水晶の軸があるが、料紙に対して寸足らずであり、
本来のものではない。漢字片仮名交じり、朱点・朱引あり。清
書本と思われる。本文の位置づけは第二章で論じる。

○「聖德太子神軍秘伝」（連391/283）

楮紙五針袋綴写本一冊。紺無地表紙26.8×18.5 cm。薄赤色
布目地題簽に「神軍秘伝巻 楠判官無相軍濃秘伝／集書秘伝
恩池正一聞書」と墨書。本書には堀江の奥書はなく、構成書
の伝本系統の違い（後述）（3）（4）から、堀江とは関わらな
いであろう。

（1）扉題「聖德太子神軍秘伝巻」、内題「太子流秘伝之巻」

『日本兵法全集6諸流兵法（上）』（人物往来社、一九六七）に「太
子流神軍神秘巻」が収載されているが、分量（連池本は本文二丁
半。一〇行漢文体。挿図あり）、内容ともに大きく異なる。ただし、

「此一巻者／聖德太子之秘伝之妙典也。中昔、明貫伝^一鬼^一、鬼一伝^一源義経。近代甲斐源氏下山入道伝^一楠多門兵衛正成^二云々。軍要之極意也。猥不^レ可^レ伝、可^レ秘々々／望月新兵衛^一」(調点は今井という奥書は字句の相違はあるが、『日本兵法全集』収載本と同一内容である。『日本兵法全集』三八七頁には「二相大悟」などが説かれ、神軍流と南木流(軍元立将之法)にも内容は異なるが同項目がある)との関わりは今後の検討課題である。

(2) 扉題・内題「楠判官正成夢想之軍機秘伝覚書」

一〇行漢文体、九丁。奥書「右数ヶ条之秘伝、天理無疑者也。(中略)若於此深旨起疑心輩者尽永代武運之運命天然焉。又可蒙武神御罰必然焉／建武元年甲戌清和十五日 楠判官正成判／遺書／楠正行并一族」。内容は『日本兵法全集6』『兵法靈瑞書』等のような軍配兵法書である。楠流兵法の中に本書をどのように位置づけるかは要検討。

(3) 扉題「集書秘伝」

全三六丁。半葉9行漢字片仮名交じり。内題無く、「一正成曰ク武士タラン者ハ仏神ヲ奉^レ信事第一也。」と始める。「理尽鈔」に拠るが、「伝云、正成が手ノ者ニ向テ此事ヲ談ジテ云、凡勇士ハ取リワキ仏神ヲ奉^レ信能ギ事也。」(版本巻三31才。他本もこれに同じ)と異なる。編纂に際しての改変かと考えるが、後続の詞章に「謀計モ可^レ有。是ハ方便シテ能トス。器ニ依テ伝ヨ。」とある傍線部も他本には無い。第一一二裏「一伝二曰、為^レ國為^レ諸民^一人ヲ罰スルヲ政事ト云」は、理尽鈔には「為^レ國人ヲ

損ズルハ政ト云フ」(版本巻三五88ウ。傍線部が無い。他本も同様)とある。現在知られていない系統の理尽鈔伝本に拠った可能性も残る。

右に引いた部分に続いては、「第一政道之障トナル者根本三」(理尽鈔巻二七上8ウ)が続き、編纂方針はよくわからない。主たる典拠は理尽鈔と思われる(未確認部分もあり)が、末尾近くの「三井寺合戦之次第」と「其図二曰」として掲出の図は、『太平記理尽図経』巻一の第一項に拠る。図は版本に酷似し、『楠家十書』(8)収載の図とは別である。これに続く「新田足利武蔵野合戦新田殿備圖(圖の誤か)云」の図は、同じく『図経』巻五9ウ・10才を基に、新田側の布陣のみを抽出して再編したものである。書名の「集書」とは理尽鈔、理尽図経などによる編纂という意味が込められているか。注目すべき資料であるが、未整理・雑纂の印象が強い。

(4) 扉題・内題「恩地左近太郎正一聞書」

半葉9行漢字片仮名交じり。版本「恩地左近太郎聞書」と用字もほぼ一致し、「楠家十書」(7)とは異なる。恩地の名は、版本では「満一」である。

一付1、上記以外、堀江重治の伝授書

○戦陣楽器故実(連391/395)

原本未見、写真による。写本一軸。表紙は蓮唐草文様の金欄

表紙と思われる。書名は新補題簽に記載されたもの。

①「戰陣樂器故実」◆

「序」とのみ記された記述に始まり、内題は不明。鐘、鐸、鏡、丁半、鈴を扱う。巻末に以下の伝授奥書あり。

堀江甚三郎

万治元戊戌年

十月十五日 重治

吉原太左衛門尉殿

②「内題「太鼓之書」」◆

内題は序題「太鼓之書序」による。太鼓に関わる故実書。巻末に下記の伝授奥書あり。

右一卷者太鼓一通之蘊奧、諸家／拔粹之要書也。且夕閱之、加^ヘ精細鍛鍊^ツ者、必成^ニ其功^ヲ者歟。秘^{シテ}之^ヲ「破損」／唯子孫之外、莫^レ洩^{モウ}他^ニ矣。

堀江甚三郎

万治元戊戌年

十月十五日 重治

吉原太左衛門尉殿

③「内題「螺法秘伝一卷之書」」(「螺法秘伝一卷之書序」)

太鼓之書に続き書写。法螺貝に関する故実書。巻末欠損しているが、太鼓之書と同様の奥書があった可能性が高い。

一付2、「和漢軍林」

拙著九〇五頁にふれたように、「和漢軍林」には、「理尽鈔」を撰取しているものと「理尽鈔」とは直接関わらないものとの二種類がある。蓮池鍋島家文庫には二部存在するが、いずれも後者であり、目録のあり方は宮城県図書館伊達文庫蔵本に近い。

蓮池鍋島家文庫の二部は、袋綴一冊(蓮991/298)と仮綴(袋状用紙の右側上下二箇所を紙縫りで括る)四冊(蓮991/299)。後者の表紙には、左肩に「和漢軍林／陣取法三」「和漢軍林之内／仕寄之法四」「和漢軍林／物見ノ法六」「和漢軍林 初中人数押ノ法七」「三・六の右下には「水野貞次郎」、四・七の右下には「成富初太郎」の署名があり(三・四・六・七の内容は、すべて袋綴一冊本に含まれる)、兵法修学途次の産物であらう。

二、正成恩地問答(軍用秘術聴書)

本書にはさまざまな別名があり、「正成恩地問答」と称するのは蓮池鍋島家文庫本のみであるが、卷子本「正成恩地問答」および「楠家十書」所収本の内題に小字で付されている「軍用秘術聴書」が一般的な呼称である。単独の図書としても存在するが、「楠家伝七巻之書」第七、「楠知命鈔」巻之六はこの「軍用秘術聴書」である。同類の南木流版本「南木武経」には存在しない。

本書は恩地正俊の編著という設定で、末尾に「建武三年五月九日／恩地左近丞正俊判／船田民部丞殿／御奏上」とある。この傍線部のあり方により、諸本を下記のように分類する。

(甲1) 船田民部丞／御奏上

…蓮池鍋島家文庫『正成恩地問答』三種

①『楠家十書』(蓮991/266)のうち。

②卷子本一軸(蓮991/296)

③『楠正成一卷之書』(蓮991/261)と合綴。

(甲2) 船田民部丞殿／御養生

…『楠氏書』(小浜市立図書館酒井家文庫蔵写本一冊)のうち「軍用秘術之聴書」、『楠兵記』(国会図書館蔵越国文庫旧蔵写本二冊)のうち「軍用秘術之卷恩地」、『楠家秘伝書』(国会図書館蔵写本二冊)のうち「軍用秘術聴書」。その他、目錄等によれば、熊本大学寄託永青文庫『軍用秘術書』、同志社大学図書館『楠公軍教』も「船田民部丞殿」とする(御奏上／御養生の別は不明)。

(乙) 和田民部丞／御奏上

…『恩地問書』(写本一帖。加越能文庫特1681/172。内題「軍用秘術聴書」)、『楠家伝七卷之書』第七「軍用秘術聴書」

(丙) 不明(宛所欠)

…『楠知命鈔』卷之六(内題「楠知命鈔卷之六」。奥書「建武三年五月日 恩地左近丞正俊判／六之卷終」)

拙著五五一頁に「『軍用秘術聴書』については、条目の立て

方や詞章面に問題の少ない『楠知命鈔』巻六を用いる」と記したが、「詞章面に問題の少ない」という点は訂正する。知名鈔は「軍用秘術聴書」等の書名を欠き、末尾の宛所も記さない。末尾跋文(拙著五五二頁に掲出)によれば、本書は、恩地が正行に対し、正成から相伝の御巻物とともに「御家の御制法」として守り伝えていたきたい、と呈上するものである。『理尽鈔』の正成は、湊川出陣に際し、恩地左近太郎・矢尾別当・和田和泉守を正行の補佐役として河内に留めている(巻一六53ウ。本書跋文も「今度討死無御免者、命ヲ全仕、君ヲ可_レ奉_二守護_一候」という。正成とともに討死するつもり恩地が、後に残る船田(和田)に正行への「奏上」を依託した、というのが本書の宛所の意味であろう。『理尽鈔』では、新田義貞の執事に船田(長門守)はいるが、楠一族には存在しない。ただし、南木流兵書においては、例えば『軍元立将法』の末尾にある正成の言葉に「和田・船田・恩地・安間・高安等ガ中一人モ存命シ、残ル人アラバ、彼諫ヲ背クコトナカレ」とあり、船田が存在する。したがって、南木流の『軍用秘術聴書』の宛所に船田とするのは誤りとはいえない。なお、(甲2)の脇付「御養生」は「御奏上」の転訛であろう。

さてその上で詞章面のあり方を検討する。まず(甲1)蓮池鍋島家文庫の三本をとりあげる。

・高時ノ滅亡(①3ウ) ②滅法 ③威法

・官方ニ天理ヲ背玉フ事…(①4オ) ②官方 ③言方

・官方ノ徳多シ(①4オ) ②多シ ③タ、シ

・四国中国ノ武士共(①4オ) ②武士 ③民士

・矢狭間ハ山城ニテハ下、平城ニテハ勝手ノ如ク可切(①6ウ)

②③傍線部誤脱

・戦場ニ出シ候ハンニ(①12ウ) ②候ハン ③トハン

③一卷書合綴本は内容を理解しないで文字面だけを追った杜撰な誤写が多い。最初の事例からは①↓②↓③という経緯が想定できそうであるが、最後の事例「トハン」は「候」の簡略な崩しを「ト」と読んだものの。②卷子本は楷書で「候」と記している。同じ誤脱があるなど、②③は近しい関係にあるが、直接の関係ではないだろう。①と②は親子関係を想定してもおかしくはないが、①の親本を含め、他にも②のもととなった本はあつたはずである。いずれにせよ、三本のうちでは①が善本であり、以下、①を蓮池本(略号…蓮)と称して、金沢市立玉川図書館加越能文庫『恩地聞書』(略号…金)、『楠家伝七巻之書』第七(略号…七)、『楠知命鈔』卷之六(略号…知)と比較検討する。

例1. 位ヲ知ルトハ敵国「*」乱ヲツ、シンデ…(蓮1オ)

*金・七…ノ政ノ善惡ヲ考テ自国ノ 知…(敵国乱ヲ)

※蓮・知は誤脱。

例2. 六二ハ城中ニ女多キハセメ易シ、七二ハ敵ノ地形ヒク

キトキンバ攻易シ。(貴安キ敵「十二ノ相」のうち。蓮2オ)

知…ナシ

金…(右二条の後に)一敵邪欲深キハ貴安シイニ此一条ナシ

七…敵邪欲深キハ攻安シ

※知は十二相に不足。金・七は計十三相となる。

例3. 十二ハ巧ンデ人ヲアナドル者ハ攻易シ(蓮2ウ)

知…タクンデ人ヲ侮ルハ易攻

金…巧イニ好テ人ヲ侮ル者ハ攻安シ

七…功人ヲ侮ル者ハ攻安シ

※七は意味不通。

例4. 城中可疲時ニハ、時分ヲ以テ夜討ニ出ヨ。夜討ノ時ハ

…(蓮6オ)。※七…傍線部誤脱

例5. サテ備ヲ立ル事ハ常々伝ル如クスベシ(蓮5オ)

金…「扱備ヲ…」の右に「イニ終ニ制法アルコトヲ不聞。

是第一ノ秘術ナリ」と傍記。

七…終ニ制法アルコトヲ不聞。是第一ノ秘術也。扱備立ル

：

※金沢本には、他にもこうした異文注記が多い。七巻書はそれを本文行に取り込む事が多い(例2も同様)が、そうしていない箇所もある。異文注記には長文に及ぶものもあり、ここで比較している四書の他に、金沢本のいう異本が存在していたはずであるが、まだ確認し得ていない。七巻書はその異本を底本としている可能性もあるが、異文の摂取は不統一であり(長文のもの不採)、金沢本もしくはそれに近い形の本文を底本にしていると見た方がよいだろう。

例6. 一問、城ヲシカト巻候時ハ何レノ法力能御座候哉。曰、

城ヲ囲事、前ノ五法ヲ尽シテ可囲。若事急ニ則ハ…(蓮9ウ)

金…一問、城ヲ囲事前ノ五法ヲ尽テ可囲。若事急ニ…

七…〇問、城ヲ囲コト前ノ五法ヲ尽シテ可囲哉。曰、若急

ニ…

※知は蓮とはば同文。金・七は傍線部を誤脱。しかも、七は誤脱した本文を、問答の形に整えるために、波線部を補っている。

以上の事例から、蓮池本と知命鈔、金沢本と七巻書の二群に分かれ、各群では知命鈔(例2)、七巻書(例3・4)が後出。蓮池本と金沢本とは、それぞれに誤脱(蓮池本例1、金沢本例6)があり、詞章面では先後は決しがたい。

小稿の課題からは、『楠家十書』の注記で述べたように、蓮池本が版本に先行する本文を有することを確認すれば一先ず事足りる。ただし、宛所を和田民部丞(金沢本)ではなく、『理尽鈔』では楠一族としていない「船田」民部丞とする蓮池本の方がむしろ、『理尽鈔』とは異なった著作を生み出そうとする南木流の姿勢に適っているように思う。

三、堀江甚三郎の兵法伝授

堀江の佐賀における兵法伝授を対象者別にまとめると次のよ

うになる。

《藤原(鍋島)直澄》

蓮池鍋島家初代、在位1639-1665。伝授年時はいずれも万治元年1658九月吉日のことである。

〇楠家五精通鑑(蓮352/3)

〇神道正授巻(蓮352/4)

〇三教(蓮352/4神道正授巻と合綴)

〇具足飭之次第(蓮352/4神道正授巻と合綴)

〇正成恩地問答(蓮991/261楠正成一巻之書と合綴)

《吉原太左衛門尉》

年時は万治元年一〇月一日。直澄への伝授の翌月であり、その図書が蓮池鍋島家文庫に伝えられていることから、蓮池鍋島藩の重臣かと目されるが、未勘。

〇戦陣楽器故実(蓮991/96)

〇太鼓之書(蓮991/95戦陣楽器故実と合綴)

《鍋島直朝》

鹿島藩主鍋島家初代(三代とする考え方もあり〔日本人名大辞典〕)、在位1642-1672。伝授の具体的図書は確認できないが、『鹿島年譜』(鍋113/106)「直朝公」に「軍法ヲ堀江甚三郎重治ニ学び、神道ヲ惣社宮内昌賢ヨリ伝へ…」の一節あり。この記事は黒木俊弘『肥前武道物語』(佐賀新聞社、一九七六)

一三八頁などにも引用されている。伝授時期は不明であるが、直朝の在位期間からして、直澄や吉原太左衛門尉らへの伝授と同じ頃であろう。この『鹿島年譜』記事の存在により、直澄らへの伝授の信憑性も裏付けられることになる。

『葉隠巻首評註』（佐賀県近世史料）第八編第二巻収載。解題によれば、筆者は久米邦武、成立は明治二〇年から大正五年までの間）二一四頁に次のようにある。

深江平兵衛信溪入道して安玄といひ、寛文二年楠正成の忠義を敬慕し、其像を彫刻の志願を有志者に勧進し、光茂公を始め御三家・御親類より諸侍・僧侶まで余多寄附金あり、京師の仏師法橋宗而に囑して彫刻し、翌年五月廿四日、佐嘉郡北原村の永明寺に安置す、櫻井駅父子訣別の像にて、相對して龕に坐し龕の戸に従士を画く。元禄四年光圀卿の湊川建碑より三十年前の事なり、

光茂は佐賀藩第二代藩主、父は初代勝茂の四男忠直。寛文二年1662当時の御三家蓮池鍋島家は直澄（勝茂五男）、同鹿島鍋島家は直朝（勝茂九男・忠直・直澄と同母）の代である。寛文二年は、上述の神道正授巻に直澄とその嗣直之が記名した年でもある。深江の行動と佐賀藩における堀江甚三郎重治の楠流兵法伝授とは何らかの繋がりがあろう。

堀江の伝授対象者が現在のところ分かっているのは、支藩関係者ばかりであるが、本藩、小城藩にも広がっていたかもしれない。また、こうした伝授が「政治を主導した幕藩領主層（執

政クラスも含めていう）の意識にどのような影響を与えた」（若尾政希『太平記読み』の時代「一五〇頁」）のか、直澄らの関係資料の調査も今後の課題であろう。

四、堀江伝授資料の特徴

神道正授巻（連5524）（1）巻末を系図の形にして示すというようになる。

左馬頭正儀―右馬助正秀―大饗入道橋正盛―右衛門佐橋盛信―右馬頭盛景（『楠家十書』（5）は盛宗）―太夫判官盛秀―右馬頭長盛（『楠家十書』（5）は長成）―左馬助隆成―河内守正虎―堀江河内守重政―堀江無樂入道重直―堀江新五郎重清―堀江左門尉重勝―堀江甚三郎重治
右の正儀から正虎にいたる系図が『尊卑分脈』四「橋氏系図」等に近いことは先に述べた。問題は正虎以降である。名字も堀江に変わる。兵法家の堀江については、綿谷雪・山田忠史共編『増補大改訂 武芸流派大事典』（東京コビイ出版部、一九七八）にも見えず、正虎の子重政も確認できない。

楠正虎には男子が二人あった。ひとりは大饗玄正といって宇喜田家につかえたが、（中略）。楠正虎のもう一人の子は、楠甚四郎正辰といった。これが楠不伝の初代であって、山科言繼卿から源家古伝兵法の手ほどきを受け、言繼卿の妻の妹をめとってから天正十二年、名を甚兵衛成辰とあらためて越前へ下向した事は『言繼卿記』天正十二年十一月二

日の記事が証明する。(二四四頁)

結局、正虎から堀江重政へと繋ぐ経緯は不明であり、重治がどこから佐賀に来て、その後どうなったのかもわからない。今なしていることは、残された資料から堀江の兵学の輪郭を描いておくことである。

《南木流》

※他資料により、南木流兵書の一部として確認できるもの
○神道正授巻…連 352/4 『神道正授巻』(1)

連 991/260 『楠家十書』(1) *堀江奥書無し

○軍元立将之法…連 991/260 『楠家十書』(5)

*本稿第一節冒頭に示した理由により、堀江伝授資料と判断。

○正成恩地問答(軍用秘術聴書)

…連 991/261 『楠正成一巻之書』(3)

連 991/260 『楠家十書』(6) *堀江奥書無し

連 991/296 『正成恩地問答』 *末尾欠損

《堀江独自の楠流》

※国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」を検索するに、「楠家五精通鑑」は佐賀県図のみ。「三教」は関西大学本山コレクションに外題「三教之巻」内題「三教巻」とする写本六二丁一冊がある由(未見)。「藏身法」は記載が無い。

※「藏身法」は蓮池本『神道正授巻』に包摂されており、

三教も南木流と親近性が認められる。

○楠家五精通鑑…連 352/3 『楠家五精通鑑』(1)

○三教…連 352/4 『神道正授巻』(2)

○藏身法…連 352/4 『神道正授巻』(1)のうち

連 991/260 『楠家十書』(1) *堀江奥書無し

《楠流以外の兵書》

○戦陣樂器故実(連 991/96)

○太鼓之書(戦陣樂器故実に続く)

○螺法秘伝一巻之書(右に続く。堀江伝授書の可能性高し)

○具足飭之次第…連 352/4 『神道正授巻』(3)

国文研DB「先陣樂器故実」「螺法秘伝一巻之書」「具足飭之次第」は佐賀県図のみ。兵書の「太鼓之書」は記載無し。いずれも武家故実であり、DBに類書は無いが、内容的に特殊というわけではない。室町期以前に遡るであろう伝統的な武家故実書の流れを堀江が学んでいることに注意したいのである。

さらに『楠家十書』の解題末尾に述べたが、『楠家十書』全体を堀江の伝書とみなす場合、その中には、室町期兵法書『軍政集』や『恩地左近太郎問書』『太平記理尽図経』という、南木流ではない(『理尽鈔』に由来するいわゆる陽翁伝楠流)も含まれている。『楠家十書』の性格についてはなお検討すべきであるが、堀江の兵学が南木流に留まらない、幅広いものであったことは確かである。

おわりに

南木流の兵書は数多くあるが、書写年時を示す奥書等はほとんど無い。刊行された初期のものを挙げると次のようになる。

楠知命鈔

延宝八年（一六八〇）三月吉日刊

南木武経

延宝九年五月日序、天和元年吉辰（一六八二）刊

楠法令卷

延宝九年（一六八二）三月吉辰刊

※九月二十九日に天和改元。本書は南木流ではないが、『楠家伝七巻書』巻一に採録されており、ここに掲出する。

楠家伝七巻書

寛文九年三月既望（一六六九）序、天和二年

（一六八二）三月刊

南木惣要

元禄二年（一六八九）一〇月序、元禄十二年

（一六九九）五月刊

刊行は一六八〇年代を中心とし、制作年で最も古いものは一六六九年である。今回、蓮池鍋島家文庫蔵本の存在により、南木流兵書は万治元年（一六五八）にはすでに存在していたことが明らかになった。万治元年は、『太平記評判秘伝理尽鈔』（無刊記。正保二年（一六四五）をあまり遡らない時期の刊行か）の板行からほどない時期である。南木流兵書が『理尽鈔』の影響下にあることは確かであるが、『理尽鈔』板行が契機となったのか、それとも写本時代にすでに胎動があったのか、『楠正成一巻之書』（連991/26）（2）「雑書」でふれた『参河後風土記』の南

木流撰取とあわせ、なお検討を要する。

付記 調査に際しては、佐賀県立図書館資料課郷土調査担当の石橋道秀氏をはじめ、レファレンスカウンターの方々に種々お世話になった。本稿で言及した佐賀藩関係資料のほとんどは、そのお教えによるものである。厚く御礼申し上げます。

なお、別に「『太平記秘伝理尽鈔』研究」補遺稿」（愛知教育大学大学院国語研究24、二〇一六・三）を予定している